# 主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年9月に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒302-0001
茨城県取手市小文間4401-1
福田玲子方　TEL / FAX 0297(85)6665

2021.8
No.109


CONTENTS


1p　巻頭言　……渡邉　俊行

特集　「画家と『食』を巡る話」

2p　「香月泰男の食、ことばから」
……榎本香菜子

4p　「イエスと弟子たちは『最後の晩餐』で何を食べた?」
……續橋　守

5p　「赤羽モンマルトル·周辺の作家たち」
……返町　勝治

6p　「私の好きなベトナム料理2つ」
……グエン·ディン·ダン

7p　「パリの食事」
……長沢　晋一

8p　主体展開催にあたっての新型コロナウイルスへの感染症予防対策について

9p　第56回主体展 企画展示
「素描のちから」

9p　石崎哲男さんを悼む
……工藤　悦子

ART WAVE

10p　2021年春 コロナ禍の美術展
武蔵野作家展…前山　陽子
神奈川作家展…黒川　洋
中部作家展……伊藤　明美
ちば作家展……大西　佐頼

12p　インフォメーション
展覧会記録
編集後記・その他

「2021未来へ」大林賢三

## 「何もかも新鮮で輝いていた」

渡邉俊行

妻が声楽の練習をしているアトリエで機関紙「主体美術」109号の原稿の為、パソコンに向かい合っている。背中合わせに（昨年予定されていた）56回展のための完成した作品と遅々として進まない次の作品がある。そしてこの巻頭文はなかなか書けない。焦りがあり制作にも集中しないのだが、アトリエに居ると何をするでもなく充足感がある。

アトリエの書架には高校時代に購入していた雑誌「美術手帳」と教職に就いてから現在まで購読している「芸術新潮」がある。「美術手帳」1964年（高校2年）10月号手帳通信に「自由美術家協会から麻生、森ら三八名退会」「これだけ多くの主要作家が退会する前になぜ解散してしまわなかったのか不思議である。また退会した作家達が新しい団体の結成をほのめかしているが、これも理解に苦しむ」との記事。ジャーナリズムは冷ややかな目で見ていた。当時は美術団体無用論の風潮が強かった。海外からアンフォルメルや抽象表現主義、国内では具体美術や九州派が紹介され影響をうけた。国立近代美術館は京橋にあり、そこで安井賞展を観たり、近代美術館の目と鼻の先にブリジストン美術館があり、青木繁の「海の幸」「自画像」、関根正二の「子供」を観た。背景の青と朱は強烈で観るたびに感動した。

浪人時代は目白にあるすいどう端美術研究所で描いた。当時浪人生は300名程いた。そこで榎倉康二氏の指導をうけた。最初の油彩画コンクールの時、主任の田口安男氏に「見えるものは全部描きなさい」と言われ、肌色の絵の具を私の腕に塗り「違うでしょう。絵の具屋の造った絵の具は駄目です。色は創りなさい」と絵の具箱の色は制限された。制限は最高の自由かもしれない。指導を受けた絵の具はその後、アクリルを使用する迄変わらなかった。また「好きな作家のデッサンや資料は古書店を回って探しなさい」といわれた。自分の周りの見るもの聞くものがみな新鮮で輝いて見え、高揚感があった。一学期のデッサンのコンクールは石膏像マルスの顔と胸が逆光の位置だった。自然光の中の物と空間の美しさは言葉では言い尽くせない程感動した。マルスのデッサンは国画会の友人T氏に渡った。夏休みは東京駅前で靴磨きの人と並んで旧東京駅を油彩で描き、午後は講習会でデッサンを描き、夜は人工光で半裸の自画像を描いた。青木繁を観た高揚感が乗り移ったようで、混沌の中で終了した。また日の出前の朝、外光が差し始めた中でラボルド（石膏像）と青りんごと植物を逆光で描いた。明け方の光の中、その存在と空間の美しさは喩えようがなかった。ロートレックのグレーの美しさを身体一杯に感じて描いていた。自画像はその後北海道の大学で教鞭を取ったK氏に渡ったと聞いている。

1960年代末、大学紛争は警察の介入で終わった。虚無と孤独の中、時間を取り戻すようにがむしゃらに描いた。物の存在と空間の美しさをこの時ほど感じた事は無い。自然光に満ち溢れた大石膏室で大型の石膏像を描き、夜は自画像を描いた。なぜ「自画像」なのか、今でも判らない。孤独な時間に惹かれた。中本達也氏の指導を受け「タブローは空間と空間の対立·衝突の緊張感」そして「曖昧や情緒」を廃された。「反権力、反権威。孤立を恐れず自分に即して生きる」氏の精神は今も私の中にある。団体展無用論、大学解体と多感な時期に受けた考えからは、その後団体展を受け入れるには時間が必要だった。そしてそれから長い時が流れた。

2021年、さあ仕切り直しの主体56回展だ！

# 「画家と『食』を巡る話」

人間は食べる生き物である。いや動物だってみな食べているじゃないかと思われるかもしれないが、人間と『食』の関係はそれとは意味が違う。人はただ空腹を満たすためだけに食べるのではない。そこには他の動物にはない何か特別な意味がある。それはいわば『食の文化』というべきものだろう。

世界では多様な食の光景を見ることができる。インド人は様々な食材をスパイスで煮込んだカレーを指先で器用に食べる。北アフリカの伝統料理は小麦粉をフレーク状にしたクスクスだ。カナダのエスキモーは極寒の地で生肉だけを食って生きていられるらしい…なんとも実に興味深い。

日本は米食に合わせて魚介や肉、野菜を繊細に調理する和食の技術を磨いた国だ。北京･広東･四川･上海･福建の五大料理を誇る中国は"四つ脚のものはテーブル以外何でも喰らう"という食の一大迷宮だ。アメリカはカウボーイの国、分厚いステーキに齧り付く一方で都会ではベジタリアンを標榜する人たちもいる。フランス料理は伝統的に重いソースが定番だったが、近年は和食の影響を受けた"ヌーヴェル･キュイジーヌ"が流行っている。イタリアの"マンマの味"パスタは日本人にもすっかりお馴染みとなり、我々にとってももはや国民食だ。『食』は世界中の民族の多様性と文化、歴史の玉手箱なのだ。

『食』はクリエイティヴィティ（創造力）と強く結びついている。

芸術家には食いしん坊が多い。とりわけ小説家はそれをよく作品に残している。池波正太郎『鬼平犯科帳』、檀一雄『檀流クッキング』、開高健『食の王様』…そうそうたる顔ぶれ、みんな酒食の達人だ。北大路魯山人、浜田庄司など陶芸家も『食』を愛した。食事と器は切っても切り離せないからだ。画家だって『食』を愛した人は数多いるだろう。『食と芸術』はまことに相性の良いパートナーなのだ。『食』は芸術家の人となりを表す。そのことに改めて気付かせてくれる画家。香月泰男のエピソードから、この特集を始めたい。

▲「bog」齋藤典久

「bog」と言うアイルランドの湿地帯。湿地帯の植物が時間をかけ朽ちていき、最後にpeat（ピート）という土になる。それを乾かしてカマドや暖炉の燃料にした。燃やすと甘い香りが漂う。スコッチウィスキーを作る過程で、麦芽を乾燥させる時に無くてはならないのもこのピートだという。

## 「香月泰男の食、ことばから」

榎本　香菜子

### 黒鯛（くろや）

今から黒鯛のしゅんだ。
塩水で光る真黒な膚は
絵に描いても面白い。
春菊をそえた桃色の刺肉の
舌ざわり歯ざわりが好きだ。
ちその実をふりかけた
茶づけは、このうえない味だ。
ぞうふのから煮がまたよい。
田舎の料理、わが家の料理は
至極単純、それだけにまた幼児からの
したしまれた味だ。
私の味覚神経を育ててくれた
ものの一つであるこの黒鯛の味は
山陰の磯で捕れたのが一番よい。
外の地方のは食ったことがないから、
今年もまた食ったり描いたりしよう。

（昭和28年11月14日／毎日新聞）

1953年毎日新聞に掲載された香月泰男のことば。山口県に知人もいない私は黒鯛のことをくろやと言うとは知らなかった。黒鯛は不味い魚で有名なので、あえてこのようにとりあげるところに強い思い入れを感じる。香月は沢山の身近な食べ物を描いた。カブ、タケノコ、カボチャ、ジャガイモ、ソラマメ、シシトウ、トウモロコシ、ミョウガ、リンゴ、ブドウ、サクランボ、ウニ、サザエ、エビ、ウナギ、トビウオ、カニ、カキなど。それらはどれも気負わず、伸び伸びとした線で描かれ、呼吸をしている。香月の「食」にまつわる言葉は印象的だ。

「料理の進歩しない国は、芸術にも立ち遅れるものである。はっきりいえば、食べ物飲み物の味を判別できぬ人間は、なにごとも判別不能の人間であるということだー。」実はこれ、ギリシャに行った折の料理批判。なかなか痛烈。そもそも、巨大な神殿、彫刻に何ら関心を示さず、そのようなもので人間の幸福が得られたのだろうかと懐疑的だ。この作家は、東京だって一地方に過ぎないのだと言って、生まれ故郷、山口県三隅村を離れなかった。中央に媚びず、頑固に自分の時間軸でどっしり腰を据え、制作を続けた。18歳の時、私は図々しくも香月に手紙を出した。律儀に送られてきた返信がわりの個展案内状には、家族以外の者と関わると相手のことを考えたりして非常に疲れる、それより仕事して（と言っても何も重労働と言う程ではないが）後 一杯（世間並）の酒を飲めれば至極満足出来る日々である、とあった。もう、それだけで十分理解した。

「毎日の食事のように仕事しよう。殊更求めずに手近な、容易に手に入いる材料で料理して食べよう。」「料理をされる魚の悲しげな訴えるような眼射を見る時、鍋の中で苦しさに口を食い締める貝の声を聞く時、私達人間は、人間の力に何一つ抵抗し得ないような弱いものに対する程残忍性を発揮するようです」

恐らくは、過酷なシベリア抑留時代、人間の、ひいては己の醜さ、狡さを、諸々を見た作家は、単純な善などというものを信じていない。国家も信じていない。"雪の中はわづかなよごれも目立ちました"という言葉にはハッとするものがある。何が大切なことなのか、それが食への姿勢にも強く表れているように思う。田中優子著「石牟礼道子もだえ神の精神　苦海･浄土･日本」を読んだとき、石牟礼道子の食への姿勢と見事に一致した。彼女は高価な食へのグルメなど舌の白痴化と称している。香月は、地球は人間だけのものではない、と警鐘を鳴らし、石牟礼道子と同じく、食することと、自然との一体化を体現している人だった。

温暖化が進む現在、将来、肉すら供給できなくなり代替肉になるのではないかという声も出てきた。自然界のものをいただく、毎日台所に立ちつつ、食にも謙虚でありたいと思う。

引用　「画家のことば」新潮社、「春夏秋冬」香月泰男　絵と文　新潮社

香月泰男美術館のご協力により、2017年当時の「食」に関する企画展「香月泰男　画家の食卓」の資料をご提供いただきました。今回の機関紙の特集としてまたとない内容です。興味のある方は、美術館のホームページをご覧ください。

香月泰男美術館　検索

**香月泰男美術館　企画展**
**『香月泰男　画家の食卓』HPより転載**

## 2017年12月1日～2018年3月26日
## 香月泰男美術館

# 「香月泰男 画家の食卓」

食材を描いた作品を数多く残した香月は、一時期"厨房の画家"の異名をとりました。本展では、1950年代以降に描かれた食材を中心に紹介します。

食材のある風景や、魚、肉、野菜、果物といった食材そのものの絵からは、香月家の台所事情が垣間見えるようです。一方で「主人が青いトマトが描きたいといえば植えました」という夫人の言葉からは、自らの意思で描きたい対象を選んでいたことが伺えます。

食材を描き続けた時期は、シベリヤ抑留から復員した後の1950年代に集中しています。これは、抑留時に餓えをしのぐため、野草などを探して食べる「生きるための食」の経験の発露とも考えられるでしょう。

**開催中**

## 「香月泰男のフランス」
2021年7月21日～10月11日
香月泰男美術館（山口県長門市）

展覧会「香月泰男のフランス」始まりました。1956～57年のスケッチを10年ぶりに公開しております

（香月泰男美術館公式Twitterより）

**これからの展覧会**　（香月泰男美術館HPより）

## 「生誕110年　香月泰男展」
2021年9月18日ー11月14日
神奈川県立近代美術館葉山
〒240-0111神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1
http://www.moma.pref.kanagawa.jp/exhibition

2021年10月25日の生誕110年を記念し、代表作「シベリヤ・シリーズ」全57点（山口県立美術館蔵）を含む約150点で構成される大規模な展覧会が開催されます。

当館からも香月のデビュー作≪雪降りの山陰風景≫1934を含む1930～50年代の作品を中心に出品しております。

新型コロナウイルス感染拡大状況等により、会期等が変更となる可能性があります。最新情報は当ウェブサイトをご覧ください。

## 黒鯛（クロダイ）

東アジア沿岸域に分布する大型魚で、食用や釣りの対象として人気がある。日本ではチヌ（茅渟、海鯽）という別名もよく用いられる。

身はタイ科らしく歯ごたえがある。特に旬を迎えた夏頃のものはマダイにも劣らない美味とされるが、やや磯臭いと言う者もいる。刺身、洗い、塩焼き、煮付けなど和風料理の他、ムニエルやアクアパッツア等の洋風料理でも食べられる。
（Wikipediaより抜粋）

# イエスと弟子たちは『最後の晩餐』で何を食べた?

續橋　　守

ミラノでレオナルド･ダ･ヴィンチの「最後の晩餐」を観たのは約50年前の6月のこと。ちょうど主体8回展の年で私は出品を休んでいた。その1年前からパリに住んでいて、友人の画家と2人でイタリア、ドイツの各地を列車で巡る気楽な旅の途上だった。ダ･ヴィンチがサンタ･マリア･デル･グラーツィエ修道院の食堂に1495年から3年かけて制作した幅約10メートルの大画面を前にして、これがルネッサンスの大芸術家の傑作かと圧倒された。同時に全体に絵の具の剥落が広がっていて、今後保存はどうするのかと心配したことを覚えている。従って今回の特集テーマのような食卓に何が並んでいるかなどとても考える余裕はなかったのは当然である。

テーマについて語る前に、取るに足らないことだが、宿泊したミラノの古いホテルで忘れ難い出来事があった。洗面台で洗濯していたところ廃水口に靴下片方を吸い込まれてしまい、苦労の末ようやく取り出せたことである。ダ･ヴィンチには申し訳ないが、ミラノでのもうひとつの思い出である。

さていよいよ「最後の晩餐」に描かれているメニューについてだが、編集部からの資料によれば過去に多くの本が出版されていて、具体的な内容が紹介されている。主なものはふっくらとした丸いパンと大皿の上の魚、オレンジやレモンが添えられていてグラスには赤ワインといったところ。魚はウナギではないかとの説もあるそうだ。

では実際に2000年前のイスラエルでの食事についてはどうだったのか。手元にある豊富な図解付きの本「イエスの時代の日常生活」(ミリアム･ファインバーグ･ヴァモシュ著)によれば、まず一般庶民は床か敷物の上に直接座り、裕福な家では低いテーブルに片肘をつきながら横になって食事をしたそうである。ダ･ヴィンチが描いたような机ではなかったことになる。食べ物については柔らかいパンと魚、各種野菜や果物など多様で、特別な日にはほぐした魚と小麦粉を混ぜて焼いたパイや子羊の肉がメインで、飲み物は赤ワインのほかにナツメヤシやサボテンのジュースもあったとのこと。もちろんダ･ヴィンチもそれらを参考にして描いたことだろう。

西洋における宗教画はほとんどが聖書を題材にしたもので、「最後の晩餐」もイエスが十字架上で死を迎える前の晩、弟子たちと最後の食事をした場面である。イエスはパンとブドウ酒の杯を取り弟子たちに与えて次のように命じた。

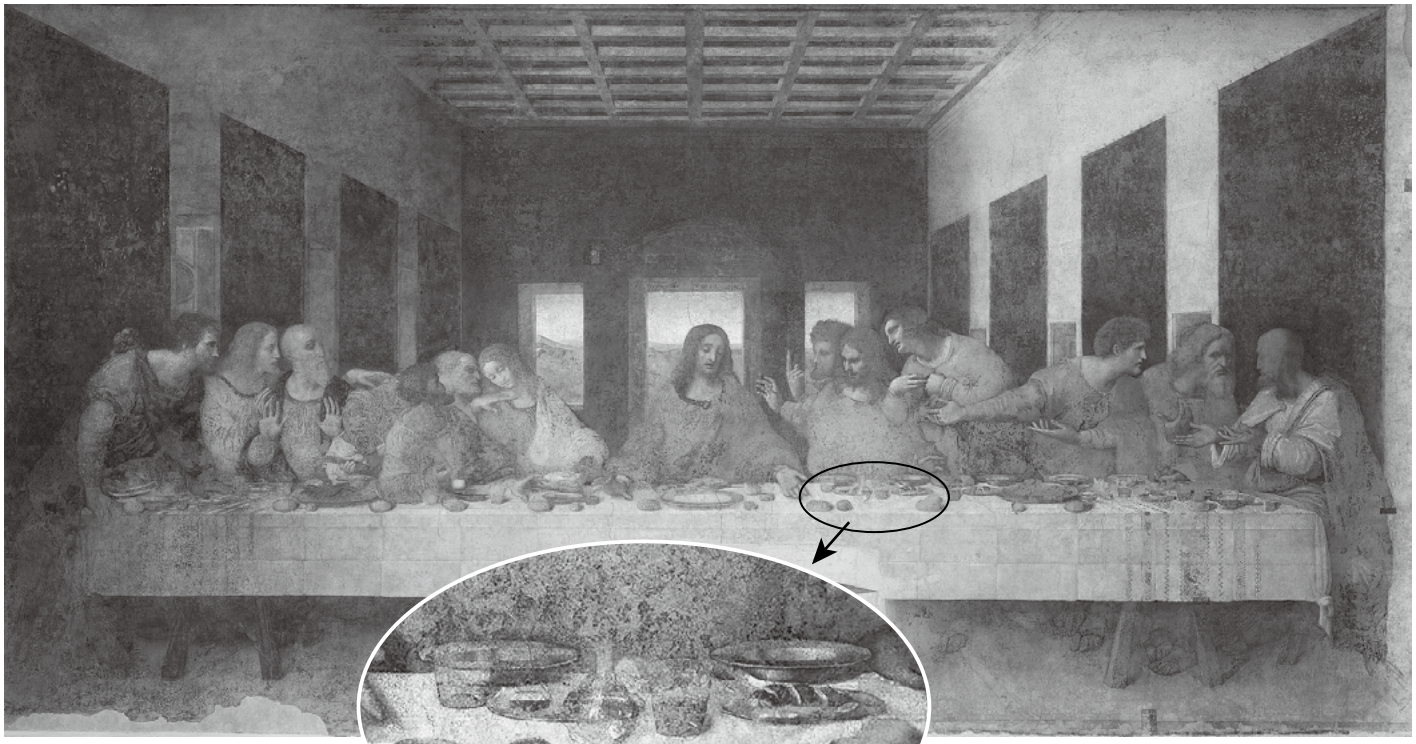
「これは、あなた方のために渡される、わたしの体である。これは、私の血である。私の記念としてこれを行いなさい」(ルカ福音書22章より)

その時以来、教会では日曜日毎に信者が集まって、同じような形式の礼拝(ミサ)が行われており、信者は聖体と言う白いパンをいただくことができる。一昨年の11月、カトリック教会ではローマからフランシスコ教皇を迎えて、5万人が参加して東京ドームでの集会が開催されたが、これも大規模な最後の晩餐と言えるだろう。

実は私も聖書をテーマに何枚も描いたことがある。しかし消化しきれないまま主体展(12回展)に出品し、落選も経験したのであとが続かなかった。しばらくしてハガキサイズのキリストの絵を頼まれた。緊張してうまく描けない。焼酎を飲みながら深夜焚火を囲む山谷のホームレスの人たちの真ん中にキリストが出現したら…と勝手に想像しながら私も一杯飲んだ。いい気分になって一気にペンを走らせたのが"復活のキリスト"である。私なりに気にいっている。

さて新型コロナのせいで毎日の生活に様々な影響が出てきている。美術館が一時閉鎖されるなどして無関係ではいられない。絵描きはこの機会に室内でじっくり制作すればよいと言う考えもあるようだが、いずれにしてもこの現実の中で自分の仕事を一歩でも前に進めていくしかないと思う。

「復活のキリスト」　續橋　守



レオナルド･ダ･ヴィンチ
「最後の晩餐」
ミラノ、サンタ･マリア･デレ･グラッツィエ教会

ワイン……「キリストの血」
パン……「キリストの体」
丸い果物…「人類の罪」
水……「洗礼＝新たな生き方に入ること」
魚……「キリスト」

# 赤羽モンマルトル・周辺の作家たち

返町　勝治

人は2度死ぬという。1度目は肉体が滅びたとき、そして2度目は人々の記憶から完全に消え去ったとき。主体展に出品を始めた50年ほど前、赤羽周辺には先輩作家が何人も住んでおり、折に触れて故人の記憶が色あせることなく蘇る。そんな思い出の主体美術の作家たちの姿を、食事の風景とともに思い出すと彼らが今でもそこにいるような気がしてくる。

赤羽駅西口から師団坂を上った先に吉田　弘さんのアトリエがあった。ガレージの2階で専用の入口があり「赤羽絵画研究所」の看板が掲げられていた。週末の夜に若い人達数人が裸婦デッサン会をしていて、誘われて数年の間参加した。吉田さんは顔を出さず皆で自由に描き、時にはモデルさんの奢りで一緒に夜食のラーメンを食べに行ったりした。若かったとはいえ気の毒なことをしたと思う。

吉田さんは奥さんに先立たれてから駅前にあった魚がし寿司で夕餉の一時を過ごすことが多かった。夕刻に店の前を通るとガラス窓の向こうにいつも決まった席に座る白髪交じりの長髪をなびかせた吉田さんをよく見かけた。一人のゆったりとした時間はとても貴重なものに思え、声をかけることは憚れた。

川上貫一さんと影山吉之さんもこの研究所に通っていた。40歳を過ぎてから絵の道に入ったお二人は、時間を取り戻すかのように猛然と情熱を燃やして競い、川上さんなどは「量から質へ」を目指すといい、毎年100号を10点ずつ搬入して作品が審査室に入りきれなかったことは今でも語り草になっている。

影山さんは寡黙で研究熱心だった。作品のモチーフは年毎に変わったが、社会の矛盾を告発するテーマは通底していた。或る冬の夕方駅前で専売公社から仕事帰りの影山さんに偶然出会い、行き付けだというバーに誘われた。乾き物のナッツなどをつまみに水割りを飲みながらポツリポツリと近況を語り、職場に自分の大作を飾らせてもらっていると嬉しそうに話してくれた。影山さんと二人で飲んだのは初めてのことだったが、それから数日後に彼が脳卒中で倒れて亡くなったと聞いたときは到底信じられぬ思いがした。まだ51歳、これからという時だったのに。青黒い幻想的な化け物のシリーズが印象に残る。

吉田さんのアトリエから赤羽駅周辺の低地をはさんだ南方の中坂を上った高台に堀内菊二さんのアトリエがあった。文学好きの堀内さんとは近隣に何軒かある古本屋でもよく会ったが、安い飲み屋にも詳しかった。壁から天井までポスターが貼られた映画狂でアル中気味のマスターの店で、カウンターに並んだ煮物の小鉢を取り、つまみながらビールを飲み始めたら、堀内さんが耳元で「ボクはここでは料理を食べないことにしてる。あれはいつ作ったかわからない」と囁いた。ソ、ソレハ早クイッテヨと胸の奥で呟いたが、味はそう悪くなく幸いお腹を壊すこともなかった。

堀内さんは腰の低い物静かな人だったが、カウンター席だけの小料理屋では女将に促されてマイクを握った。眼を閉じて唯一の持ち歌だという旧いシャンソン「さくらんぼの実る頃」を歌い出し、歌声は低く静かに路地裏の奥へと流れていった。

「赤羽モンマルトルの太陽」といわれた大野先生（主体展では作家同士で先生と呼ぶのを止める事になっていて異存は無いのですが、自分にとっては若い時分に出会い何かと薫陶も受けた大野五郎、寺田政明、吉井 忠のお三方は例外）の住まいは吉田さんのアトリエから歩いて数分の台地のはずれにあった。肩肘はらず自然体の大野先生は若い画描きたちから慕われていて、先生も皆の様子を見に気さくに自転車で回ったりしていた。堀内さんの近所で火事があったときも大野先生が自転車で現れ、二人でビールを飲みながらアトリエの窓から見物したという。

先生が70歳近くで元八王子に移る前は、上野や銀座での展覧会で飲んだ後よく赤羽まで一緒に帰ってきた。駅に着くと仕上げにもう一杯と近くの小料理屋に入り、お新香などつまみに一本のビールを二人で飲んだ。「先生はよく遅くまで飲んで身体が強いですね」と聞くと「俺は子供の頃は病弱だったけど、煙草と酒をやりだしたらどんどん元気になったなあ」とケムに巻かれた。飲み終わると小さな手帖を取り出し、女将の顔をサラリとスケッチして勘定代わりに差し出して店を出た。そんなことがごく自然に通用してしまうオーラを身に纏っているのだった。

カット：中嶋　修

# 私の好きなベトナム料理2つ

グエン･ディン･ダン

**Bánh dày – giò　バインヤイ（餅）とゾー（ハム）**

幼い時　私の大好きだった食べ物は bánh dày バインヤイ（お餅）と giò ゾー（ハム）です。ベトナムのバインヤイは日本のお餅にとてもよく似ています。これは伝統的な2つのお餅の内の1つです。

バインヤイはフン王6世（紀元前1712～1632）の18番目の息子が父親に捧げたものです。（注:王は、世界中から一番珍しく美味しい食べ物を持って来た息子に、王位を譲ると告げた）もう1つは bánh chưng バインチュンと呼ばれ、豚肉と緑豆をもち米でゾン（注:クズウコン科、バナナの葉に似た大きな葉。ベトナムの森林に自生している植物）に包んで四角くし茹でたものです。バインヤイは天を、バインチュンは大地を象徴しています。

Giò ゾーは脂肪のない新鮮な豚肉を使い、手で細かくし、ナンプラーを加え、バナナの皮で包み筒状にし、茹でます。食べる際は、切って盛り付けます。

私はベトナム戦争中に育ったので、食べる物が不足していました。お米すら十分ではないのですから、肉なんてなおさらです。戦争前は、ハノイのフエ通りに Bánh dày giò chả（バインヤイ ゾー チャー）という有名なレストランがありました。　そこでは、もっとも美味しいバインヤイやゾーを食べることができました。しかし戦争中に閉店。そこを通る度に私は、早く戦争が終わらないかな、そしたらこのレストランで一番好きなものを食べるのに、と夢みたものでした。しかし、この夢は叶いませんでした。戦後、レストランの主人は店を閉じ、全く違う仕事を始めたようでした。ともかく、私は最も好きだったレストランに再び訪れる機会を失ったのでした。

日本に来て私は、バインヤイと殆ど変わらない日本のお餅を見つけました。とても柔らで、口当たりよく滑らか、ですから私たちは冬によく食べるようになりました。特にお正月の時期ですね。来たばかりの頃、私たちは東京のベトナム料理レストランでゾーを注文したものでした。でも、その内にサラミや生ハムなど他の美味しいものを代わりに食べるようになりました。食べる料理も国際的になりました。

バインヤイとゾーは私の2001年の絵“記憶”（Memory）にモチーフとして描かれています。この絵は和光市民文化センターでの私の最初の個展（2001）で展示されました。この絵ではアオザイを着た女性（モデルは妻）が灯油ランプとバインヤイとゾーの乗ったお皿の前に座っているところを描きました。ハノイの景色が背景に見えます。

**bánh cuốn バインクオンについて**

東京にはベトナム食品店がいくつかありますが、多くの食材は取り扱っていません。そこで本格的なベトナム料理をまねて作るには色々代理策を考えないといけません。例えば、バインクオン（注:蒸し春巻きのようなもの）ですが、本来は発酵した米粉の生地をクレープ状に広げて蒸し焼きにしていき、味付けされたひき肉、刻んだキクラゲ、刻んだ葱などを混ぜた具を入れて作ります。バインクオンに使われるシートはとても薄く繊細です。それは少し発酵した米粉の生地を沸騰したお湯の上に張られた布に、薄く広げて乗せ、蒸して作られます。このような新鮮な米粉を蒸した生地は東京では見つからないし、米粉を蒸したりする作業は極めて手間のかかる作業なので、私の妻はベトナムの生春巻きに使うライスペーパーを使ってバインクオンを作ることを学びました。ライスペーパーならスーパーでも手に入りますから。その試みの結果、とても良い感じの料理になり、それからは、妻はバインクオンを誕生日や父の日、母の日のような時に作るようになりました。

もしベトナム料理を食したいのであれば、東京にいくつか良いレストランがあります。そこでは、勿論バインクオンが出されることでしょう。

★この文章は英文から日本語に訳したものです。カッコ内注は訳者による補足です。

▲bánh cuốn（バインクオン）

▲memory

# パリの食事

長沢　晋一

パリでの展覧会に初めて参加したのが2006年、昨年まで14回のグループ展と5回の個展。

1回につき10日ほどとすると190日、半年ほどのパリ滞在ということになる。これで言葉の壁が無かったらもっと違った展開になっていたかも知れないけれど、所詮パリ好きの観光旅行者といったところです。あのテロの直後にパリに入ったり、日本でもニュースになった過激なデモ、毎年繰り返されるストライキ、最後はコロナ直前のパリといろんなことがありました。

アートとしてのパリが新しいか古いかは別として、魅力的な街であることは間違いない。文化の違いを感じ常に日本と比較してしまう、その違いを楽しむために行くのかも知れない。

パリのメトロを出るときの話しですが、入口はチケットやパスを通すと扉が開く、出口ではチケットは必要なく、手で押す扉か自動の扉がついている。ある時そこは手で押す扉の出口でした。私の前に初老の婦人、私、私の後ろに地元らしき青年、そんな並びで婦人が扉を押して出ようとしたとき、私の肩越しに後ろの青年の手が伸びてその扉を押し開けようとしている。扉の外にでて、ああこれがヨーロッパなのか、と何も出来なかったことの恥ずかしさの様なものと、文化の違いと納得させている自分がいた。

滞在中はざっくり言えば展覧会、街歩き、食事の繰り返し。毎回画廊主がここはと思うビストロを探しておいてくれて、メニューの説明を聞いてのコースは期待以上であることは間違いない、しかしいつも後悔するのは、別腹とは言え2人前以上ありそうながっつり甘いデザートである、甘党の私でももてあます。

パリ在住の日本人作家とワインを何本も空ける様は、上野の居酒屋のハシゴと同じかもしれない。その中の一人T氏は私と同い年、パリは40年になるという、孫もいるのだが今は一人暮らし、そんな彼は決まって食事に招いてくれる、男の手料理だ。買ってきたのを並べる私の料理と違っていつも本格的である。彼の自宅はパリ市から提供される天井の高いアトリエ付きのアパートマンション、勿論まわりはみんなアーチスト、日本では考えられないアーチストへの待遇だ。

画廊が用意してくれるアパートで、冬のパリの十日間一人での食事は、そんな楽しいものばかりではない。歩き疲れて部屋に戻りすっかり暗くなった頃食べるところを求めて街に出る、「Menu28€」なんて書かれた看板を見ても、一人で入るには勇気がいる。まわりを見回してアレと同じものを、とジェスチャーするのが一番良いのだが、目をつむってこれをなんて注文してあの生の様な肉が出て来たらどうしようか、日本で言ったらアジのたたきをもっとつぶしたような生肉だ。結構食べている人を見かけるのだけれど、あれだけはどーもダメだ。どーもダメだと言えば牛の骨もそうだ、勿論骨を食べるのではなく、そのまわりに付いている肉を食べるわけでもない、骨の中の髄をほじくって食べる、丁度カニの足を割って食べるような感じ、いやもっとリアルだ。これが実に美味しいらしいが、これもいけない。やはり食通にはなれないようだ。

数年前の朝、パンを求めに外に出て近くの小さなパン屋に入りバケットを一本買う、確か1€だったから125円くらいだ。持つところあたりに紙をくるっと巻いて手渡されると、焼きたてだ。部屋に着くのを我慢できず、ちぎって食べるとこれが実に美味しい。パンをこんなに美味しいと感じて食べたことがない。その時の左手の温もりとあのパンの美味しさが今でもしっかり残っている。14年間一番の食の思い出が1€のバケット一本だなんて寂しいパリの食事である。

でも、紙の袋も保存用ビニール袋も付いてこない、無造作に手渡されるバケットにすら文化を感じてしまう。

▲画廊主 おすすめのビストロで貝の盛り合わせ。これで二人前?

▲牛の骨の髄

1ユーロのバケット▶

# 主体展開催にあたっての新型コロナウイルス感染症予防対策について

2021年6月

事務局　福田　玲子

新型コロナウイルスが世界的に蔓延してから、混迷の1年半が過ぎていきます。日本でも今年6月になってやっとワクチンの接種が本格化して不安感が少し和らいできたようにも思われます。また、長い闘いから感染しないためのノウハウも学んできました。

昨年開催できなかった第56回展を、今年は美術館が休館にならない限りは必ずやろうという強い思いで開催するために、主体でやれる具体案を考えてきました。まずは会員の方々が今年の主体展にどれだけ参加して、搬入、審査、展示、総会などに出席することができるのかを、はがきのアンケートで調査しました。

ワクチン接種が済んで来られそうな人、やはり今年は作品だけの参加でと考えている人、回答はさまざまでしたが、その結果は想像していた通りのものでした。例年に比べれば約半数の稼働人員になることが分かりました。密を避けることは出来るかもしれないと思う一方、それでも感染対策をしっかりとして臨むことが第一であることに間違いありません。

そこで主体展の感染対策を展覧会の流れに沿って書き出してみます。

## ■搬入受付作業時の対策

- 搬入業者、一般搬入者のマスク着用や検温、消毒の徹底のためにコロナ対策係を設けます。搬入者名簿を作成し入場者の連絡先が分かるようにします。
- 受付テーブルにはパーティションを取り付けます。作業人数は参加可能者の中から必要最少人数で役割を分担します。長時間を避けて交代制で行うことも考えています。

## ■審査会場の対策

- 審査室の密を避けるため入場者数の制限を設けます。座席数を半分に減らして、人と人との距離を十分空けるようにします。例年は70名から80名の会員が審査に来られますが今回のアンケートでの出席者は50人から40人ぐらいと思われます。作業室での仕事もあるのでこの全員が審査室に入るわけではないので審査室の密は回避できそうです。審査も長時間にならないように心掛けたいと考えています。
- 状況が変わり、これ以上の会員が審査に訪れるとしても、時間で区切り、一部交代制で審査に臨むことができると考えています。
- 随時二酸化炭素濃度を測定し安全を確認することもあります。
- 審査室作業室での食事は原則禁止ですが、やむを得ない時には対面にならず会話を避けてお願いします。なお給茶は休止ですので3時のお菓子も準備しないことになりました。

## ■陳列、投票、総会の対策

- 15室ある部屋の陳列は各部屋の作業に必要と思われる少人数で行います。
- 投票は密にならないように十分な距離と時間をとって投票を行います。
- 総会は赤羽会館小ホール（定員87名）ですが参加者も例年の半数程度と思われますので密にはならないと思われます。

## ■会期中の感染対策

- 今会期はアーティストトーク、講演会、懇親会などは行わないことになりました。
- 会期中の事務所当番、ポストカード当番は、午前午後に各一人ずつを原則として、人と人との接触をなるべく避けたい考えです。当番は必ず、検温、消毒をし、マスクを常時着用していただきます。
- 会場出入り口には消毒液を設置して、来場者に周知するようにします。
- ポストカードの販売は現金の授受はせず代金箱に入れる方式にします。また同様に作品集、機関紙なども代金箱を用意して現金の授受はしないことにします。
- チラシ、出品目録などの配布物は直接の手渡しは止めて受付に据え置くことにします。
- 事務所当番はテーブルや椅子、事務用品などの消毒を心がけます。常時換気が十分出来るよう出口扉を開放し換気に注意します。

開催の9月にコロナの感染状況がどのようになっているかが気がかりではありますが十分な感染対策を考えながら運営できるよう心掛けたいと思います。

東京都美術館の詳しいコロナ対策については以下のホームページをご覧ください。

都美術館 コロナ対策　検索

携帯・スマホはこちらから

# 「素描のちから」

第56回展では企画展示として「素描」を取り上げることになりました。

言うまでも無く素描とはデッサン（仏）、ドローイング（英）と同じく、絵画の下絵・習作のことで、更に目的によりクロッキー（仏：速写・対象を素早く描写）スケッチ（英：写生・大まかに描写）エスキース（仏：本画構成段階の試作）エチュード（仏：下絵・習作）などの名称がありますが、その区分けは明確なものではありません。

現代では素描の芸術的価値が認められて、独立した絵画の一分野としてみなされるようになり、タブロー（仏：完成作品）との境界も曖昧になっています。

彩色や陰影など表現のバリエーションもありますが、基本的には単色の線画で物の形をあらわしてバランス（つりあい）とコンポジション（構図）を整え、絵画の基礎・土台・骨格とするもので、構想を練りイメージを固めてモチーフに迫るための大切な手段です。

作家により何のためにどのように「もの」を捉えるのかはまちまちで、その多様性も面白く、素顔を垣間見るような楽しみもあるでしょう。

レオナルド・ダ・ヴィンチ
《受胎告知の天使のための左手と腕の研究》

## 惜別　『笑顔の中に秘めた想い』石崎哲男さんを偲んで

工藤　悦子

石崎哲男 氏

「cosmos（華）」F100　2019年第55回記念主体展

石崎さんが旅立ったことは、ずっと後になって知ることになりました。最後にお会いしたのは、北海道近代美術館にて主体美術北海道展が開催されている期間中で、岩見沢市から駆けつけて下さりました。当番のポストカード売り場にいつもの穏やかな笑顔で座って私たちと、来場者の応対等をして下さったことが思い出されます。

私が主体美術展に応募することになったのは、石崎さんの影響が大きかったと思います。その当時石崎さんと私は北海道の小さな公募展に所属しており、そのメンバー4人で年1回グループ展を開いておりましたので、その折には良くお話をさせて頂き初心者の私はとても勉強になりました。

石崎さんは毎年、東京の公募展（私は多くの公募展が存在する事すら知りませんでした。）に応募していて、確か3回目の落選のことをさらりとお話をしてくださり、その公募展が主体美術展であることを知りました。「主体美術展は5本の指に入る良い会なので、何回応募して落選しても挑戦する価値がある」と力強くお話しをされていた事が印象深く、今もにっこりとした笑顔が浮かんできます。その言葉に背中を押されたのか、私も次の年から応募することになりました。その時の石崎さんの裸婦を中心としたユニークな作品を、落選にする会とはどんな公募展なのだろうかと、好奇心と期待を同時に感じ、恥ずかしながら私の未熟な絵でも出品してみようかと思い、「あの石崎さんの作品が落選するのだから、当然私の作品が落選しても恥ずかしくないか…」とかなり動機は不純でしたが応募を続けました。その後2回落選を経験し何とか現在に至っております。

石崎さんは1988年24回展「マジック」F100号が入選されてから、順調に出品され会員になられたと記憶しています。

精養軒における懇親会では自然と北海道出身者が集まり歓談し、楽しい時間を過ごしました。（北海道は広いので年1回しか逢わない人も）はにかむような笑顔で記念写真を撮っていただいたことも思い出の一つです。

北海道グループ展や私の個展にもご来場下さり、何回目の個展の時には、「ブルーの色ばかり使うなあ」と強く言ってくださったことがとても心に残りました。今思えばあの時、さりげなく忠告して下さったのではないかと感じております。穏やかな笑顔の中にも強い意志と行動を感じましたし尊敬できる先輩でした。

ここ数年はお会いする機会がなく、年賀状のやりとりのみでした。2019年55回展の出品作品「COSMOS（華）」には人物の存在はなく、散りばめられた花のようなものと中央の宇宙のような円が描かれています。その様な世界に行かれ、温厚な人柄と笑顔で今も主体美術展を見守っていられるように感じます。

# 『2021年春 コロナ禍の美術展』

**2020年に開催できなかった各地の作家展が、2021年春、一斉に開催されました。そこに至るまでの各展担当者のご苦労はいかほどであったか。美術館側との協力で進めてきたコロナ対策の経験は、秋の本展で十分生かされると思います。ぜひ参考にして下さい。**

コロナ禍の美術展から 武蔵野作家展

## 第50回記念展の準備を

責任者　前山　陽子（東京都）

2021年3月30日（火）～4月4日（日）、埼玉県立近代美術館·第1展示室にて、第49回「主体美術武蔵野作家展」を開催した。出品者を募ったのが昨年12月、新型コロナウイルスの感染状況が特に悪い時期だったこともあり、希望者は例年より大幅に少ない34人。その後、会期直前の体調不良などで2人が出品を辞退し、最終的には32人での開催となった。

コロナ禍以前に申し込んだ広い展示室に、出品者数は当時の想定の7割。壁が埋まるか心配したが、急遽出品作の追加募集をかけたところ、多くの方が応えてくれた。加えて、主体展の作品集や関係冊子の閲覧コーナーを設け、無事に会場作りをすることができた。

中止となった昨年は、前事務局の桑原さんがその判断や会場費の返金交渉で苦労をされていた。今年は美術館側の体制が整っているようで、社会情勢による展示室の利用可否の連絡も早く、会場費の納入も会期まで猶予いただいた。感染予防対策についても書面で具体的な指示があり、それに沿って実施した。

会期は運良く緊急事態宣言明けの時期と重なり、会場の雰囲気や来場者数は例年とあまり変わらなかった。展示も主体展に向けてと思われる大作がいつも通り見られた。全体的には中小作品が増えた印象だが、出品作の追加募集をした影響があるだろう。また、今年は出品者の親睦を深める懇親会や会場研究会が開催できず残念だった。しかし何よりも、無事会期を終えた事に安堵している。

出品者の減少を受け、来年はややコンパクトな第2·3展示室で開催する。昨年の中止で繰越金が大幅に減少している事も考慮し判断した。再来年以降については未定だが、出品者の減少は近年続いており、今後展覧会を継続する上で課題を見つける良い機会かもしれない。“今年はお休み”と連絡をくれた方々の復帰に期待し、次回「第50回記念展」の準備をしたい。運営面の要望や不満、アイデアなどがあれば事務局へ意見して欲しい。

最後に、相談役の桑原さん、準備をサポートしてくれた長沢さんと松本さん、展示作業や当番などに協力いただいた皆さんに感謝申し上げたい。

コロナ禍の美術展から 神奈川作家展

## 展覧会開催の際の対処方法などを学んだ

責任者　黒川　　洋（神奈川県）

第53回主体美術神奈川作家展は、2021年3月16日(火)～3月21日（日）（於、横浜市民ギャラリー）に無事開催されました。

緊急事態宣言の中を多くの方にご来場いただき、有難く、感謝しております。

昨年予定していた第52回主体美術神奈川作家展はコロナウイルス感染拡大のために中止となり、今年は1月8日から2月7日まで2回目の緊急事態宣言が発令され、同宣言は1ヶ月延長された後、さらに3月21日まで再延長という状況であり、昨年に続いて難しい判断を迫られましたが、意見集約の結果、開催の決断となりました。

昨年の展覧会中止から一年経過する中で、展覧会開催の際の対処方法などを学び、また、横浜市民ギャラリーの「コロナウイルス感染拡大防止のための施設利用上のお願い」に従い、マスク着用、アクリル板の設置、入場者数管理、連絡先確認、筆記具消毒等々の面倒はありましたが、力作が揃い、2年ぶりに主体美術神奈川作家展を開催することができました。

オープニングパーティーや会場研究会は中止し、来場者との接触を極力回避するために、作品集や機関紙の物品販売も中止しました。機関紙はパネルに貼付して掲示を行いました。

会場には、物故会員の植田寛治さんの遺作の展示も行いましたが、関内駅近隣の画廊「楽」で開催された「植田寛治遺作展」が同時期に開催となったこともあり、「第53回主体美術神奈川作家展」と「植田寛治遺作展」の両方の展覧会を観覧された方も多かったようです。

第54回主体美術神奈川作家展は、2022年3月8日（火）～3月14日(月)にて会場予約をしています。来年こそは、コロナウイルス感染が終息し、展覧会の開催可否判断に思い煩うことなく、従来どおりの展覧会を開催出来ることを願っています。

コロナ禍の美術展から
中部作家展

# つなぐ大切さ

責任者　伊藤　明美（愛知県）

新型コロナウイルス感染拡大防止の為に延期されていた「第54回主体美術中部作家展」は、愛知県美術館ギャラリーで3月23日から28日まで開催となりました。

まだ収束がみえない不安な社会状況であり、展覧会実施についての意思確認をし、多くの人々にご来場いただきたくDM送付など広報をしました。会期中の受付ではご来場の皆様へのコロナウイルス感染予防対策を念入りに行い、協力をお願いして無事に終了しました。コロナ禍の自粛暮らしから、見つめ、描いた、28名41作品の展示となりました。

入場総数363名、一日平均60.5名ですが、ご来場された方々から「じっくりと鑑賞できた。描かれた風景に是非とも出かけたい」「長年、主体美術巡回名古屋展を拝見している。昨年度は本展、中部作家展も延期となり残念に思った」「内面表現の試行作品など次の展開が楽しみ」など好意的なお言葉も拝聴できました。また、ご来場いただいた県内外の遠方からの美術関係の皆様を始め、事務所の方々から会場でアドバイスの機会を得られて感謝申しあげます。ありがとうございました。

今回は主体展出品者の募集に関して、主体美術関連資料を紹介したスペースを設けました。主体美術をより幅広く知っていただくには機関紙、図録とは別に「主体Webギャラリー2020-今をつなぐ-」の他、主体美術作家の掲載本「愛知洋画壇物語PARTI･Ⅱ」（中山真一著/風媒社）、企画展「自画像展」（一宮市三岸節子記念美術館）、「美術の窓」（生活の友社）等が閲覧でき、チラシ案内は大府市歴史民俗資料館企画展「中島佳子展」、名古屋市美術館特別展「アートとめぐるはるの旅」（故山田光春氏作品展示）等を情報提供しました。主体展出品のきっかけとなる事を願いつなげたいと思います。

第54回主体美術中部作家展を終え、メンバーが一丸となり感じ得た「つなぐ大切さ」が第56回主体展につながることと思います。

コロナ禍の美術展から
ちば作家展

# 徹底している姿勢を見せること

責任者　大西　佐頼（千葉県）

主体ちば作家展は、千葉県在住または千葉県にゆかりのある会員および出品者を中心に5月中旬にグループ展を行っています。

**■本年度開催概要**

2021年5月17日(月)～23日(日)
船橋市民ギャラリー(JR/京成/東武船橋駅徒歩5分)
会場内に個室を設け、参加者のうち2人がそれぞれ個展を開催。
参加者18名　総点数56点

**■コロナ前の状況**

2015年に出品者が一桁となり解散の危機を迎えました。緊急会議を行った際、矢野利隆さんは「解散するしかないかもしれない。ただし一度解散したら再度始めるというのは非常に難しいと思う」とおっしゃいました。

千葉県と一口に言っても、松戸･柏など常磐線沿線、千葉･船橋･市川など総武線沿線、房総では、距離的な遠さに加え路線が多系統にわたることもあり、2015年当時、千葉県在住の会員･出品者に出品案内を差し上げてもなかなか出品に至らず、手詰まりになっていました。

会員規則の改定により本展の出品経験がなくても会員2名以上の推薦で出品が可能となったことで、10代20代の出品者が同級生に声をかけるなどしてくれたことも奏功して、2019年には参加者26名、参加者の平均年齢も飛躍的に下がりました。この枠で出品した方々はその後の主体展本展への出品につながりました。

**■2020年はコロナでギャラリーが休館中止**

ほっとした矢先の2020年は、コロナの影響でギャラリーが休館となり主体ちば作家展も中止となりました。

前年主体展に初出品の方からの参加があったにもかかわらず、中止でお会いできなかったことが非常に残念でした。作品の展示とともに、作家同士の交流の場としても機能してきたので、今後も中止が続けばこの機能が果たせなくなる危機感を持ちました。

**■2021年の開催準備**

2021年の会場予約は2020年10月でしたが、コロナは予断を許さない状況で、抽選には参加しませんでした。12月になって、先は見えないもののともかく会場がなければコロナの状況がたとえ良くても開催できないので、ギャラリーを予約、開催に向けて走り出しました。

**■当日のコロナ対策**

ギャラリーの指示で、以下の対応を行いました。

- 搬入搬出および当番で会場に入った参加者全員の連絡先および体調を記入して毎日ギャラリーに提出
- ソーシャルディスタンスを保つため、足跡マークを会場内床面に貼付
- 受付に手指消毒液を設置
- 出品者･来場者とも全員マスク着用を徹底
- 大声での会話を避け、来場者にもお願いする
- 会場内での飲食禁止。例年行ってきた懇親会は中止。
- 会場内のソファーも間隔を空けて置き、ソーシャルディスタンスを確保
- 来場者全員に連絡先等を記入のうえ受付に置かれたポストに入れてもらう
- 他展示や主体本展の出品案内等の配布物は、受付で渡さず来場者本人に取ってもらう

個人的には合理的でないと感じるものもありましたが、こちらが徹底している姿勢を見せることで来場者もそれに従う雰囲気ができ、結果としてスムーズな開催となったように思います。

**■パブリシティ**

- 保坂淳さんがマスコミ各社に案内を送ってくださり、読売新聞(朝刊)の千葉版に展示の案内が掲載されました。深謝。

**■コロナの影響**

- 同居家族が高齢のため会場に来られず、宅配便での搬入搬出とした方がいた
- 職業が医療関係のために、参加を見送らざるを得ない方がいた
- 同居のご家族からの理解が得られないため参加を見送った方がいた

入場者数については例年とそれほど変わらなかったようです。会期を無事に終えることができました。参加を無理強いできないことから当番が心配でしたが、皆さんに快くご協力いただき杞憂に終わりました。

## 展覧会記録

2021年1月～2021年8月

**■奏彩 ー7つの視点ー**（山本靖久 他）
1月20日～1月26日
横浜髙島屋7階 美術画廊（横浜市）

**■色の美学・形の詩学**（柏木喜久子 他）
2月1日～2月6日
ギャルリー志門（銀座6）

**■第18回冬期ミニチュア100人展**
（伊藤明美、柴田かよ子、水谷幸子、水野博子 他）
2月16日～2月28日
ギャラリー 名芳洞（名古屋市）

**■中島佳子展**
3月2日～3月25日
大府市歴史民俗資料館（愛知県大府市）

**■表現の原点 ー素描ー**（藤田俊哉 他）
3月8日～3月13日
ゆう画廊 5・6階（銀座3）

**■視点〈鼎の眼〉展**（山本靖久 他）
3月8日～3月14日
あかね画廊（銀座4）

**■第4回弥生の空に**
（井上樹里、山本靖久 他）
3月10日～3月23日
始弘画廊（南青山5）

**■吉江新二展**
3月12日～3月28日
TS4312（新宿区）

**■2021ミニミニ100選展**
（柏木喜久子、長沢晋一 他）
3月15日～3月20日
ギャラリー暁（銀座6）

**■第11回輪展**（長沢晋一 他）
3月15日～3月20日
銀座Ksギャラリー（銀座1）

**■植田寛治大回顧展**
3月15日～3月21日
画廊 楽Ⅰ＆Ⅱ（横浜市）

**■第53回主体美術神奈川作家展**
3月16日～3月21日
横浜市民ギャラリー

**■春のCAF.N展2021**（長沢晋一 他）
3月16日～3月21日
埼玉県立近代美術館

**■第54回主体美術中部作家展**
3月23日～3月28日
愛知県美術館ギャラリー

**■さまよえる絵筆**（寺田政明、吉井忠 他）
3月27日～5月23日
板橋区立美術館

**■第49回主体美術武蔵野作家展**
3月30日～4月4日
埼玉県立近代美術館

**■水村喜一郎展**
4月1日～11月30日
水村喜一郎美術館（長野県東御市）

**■12名による絵画展ー第6回自由律俳人尾﨑放哉との対峙ー**（齋藤典久 他）
4月4日～4月10日
ゆう画廊5F・6F（銀座3）

**■福田玲子展 ー咲くー**
4月5日～4月10日
光画廊（銀座7）

**■工藤悦子個展 ー悠久の華ー**
4月7日～4月13日
札幌市民交流プラザ　札幌文化芸術センターSCARTSコート（札幌市）

**■Monochrome 白と黒の世界**
（長沢晋一 他）
4月19日～4月24日
ギャルリー志門（銀座6）

**■有馬良作（遺作）・有馬久二展**
4月26日～5月2日
銀座アートホール（銀座8）

**■水村喜一郎展**
4月27日～5月2日
ギャラリーヒルゲート（京都市中央区）

**■IKIMONO2021**（オノ・ミチ・ヒロ 他）
4月30日～5月5日
ギャラリーMOS（三重県松阪市）

**■オホーツクの作家展**（渡辺良一 他）
5月1日～6月13日
網走市立美術館 第2展示室（網走市）

**■主体ちば作家展2021**
5月17日～5月23日
船橋市民ギャラリー

**■KIZUNA2021**（榎本香菜子 他）
5月17日～5月22日
スルガ台画廊（銀座6）

**■R-4 展**（長沢晋一 他）
5月23日～5月30日
氷川の杜文化館（さいたま市大宮区）

**■KIZUNA2021**（柏木喜久子 他）
5月24日～5月29日
スルガ台画廊（銀座6）

**■第26回時のかたち展**
（中嶋修、結城智子 他）
5月25日～5月31日
横浜赤レンガ倉庫 1号館2F（横浜市）

**■たましん美術館開館記念展Ⅲ**
（柿崎 覚 他）
6月1日～8月15日
たましん美術館（立川市）

**■一葉の手紙、もしくは書物へ**
（榎本香菜子 他）
6月6日～6月19日
画廊・珈琲 Zaroff（渋谷区初台）

**■第26回 アート'95展**（荒木篤子 他）
6月6日～6月12日
たましんRISURUホール展示室（立川市）

**■續橋 守 個展**
6月7日～6月13日
画廊 楽Ⅰ（横浜市）

**■第1回サム・ホール展**
（竹内小夜子、永井直子 他）
6月11日～6月23日
ギャラリー dZi ジィ（愛知県東海市）

**■11の指標展**（長沢晋一 他）
6月14日～6月19日
中和ギャラリー（銀座6）

**■小野絵麻・二三・絵里展**
6月14日～6月26日
art space kimura ASK?（京橋3）

**■林哲生展 INTERMEZZO**
6月18日～6月30日
ギャラリー睦（千葉市）

**■山田礼二個展ー10年の記憶ー**
6月19日～7月25日
川俣町「羽山の森美術館」（福島県伊達郡川俣町）

**■長崎羊子展**
6月21日～6月27日
ギャラリーミロ（横浜市）

**■第28回心に響く小品展**
（藤田俊哉 他）
6月22日～7月4日
ギャラリーヒルゲート（京都市中京区）

**■第4回藤田俊哉油絵展**
**～Style–花と色彩～**
6月23日～6月29日
松坂屋静岡店本館6階美術サロン（静岡市）

**■キリスト教美術展 2021**
（續橋 守、山﨑 弘 他）
6月24日～7月6日
銀座教会 東京福音会センター（銀座4）

**■第7回 緑×黒×朱 展**（水谷幸子 他）
6月29日～7月11日
ギャラリー名芳洞（名古屋市）

**■The gift ー寄贈を受けた作品＋新収蔵品展ー**（續橋 守 他）
7月3日～10月24日
平塚市美術館（神奈川県平塚市）

**■画家たちの座標ーアトリエは語るー**
（紺野修司 他）
7月7日～9月12日
神田日勝記念美術館（北海道）

**■Museたちの競演**（小林宏至 他）
7月8日～7月14日
GINZASIX 5F Artglorieux GALLERY OF TOKYO（銀座6）

**■Exhibition GOCHI**（長沢晋一 他）
7月19日～ 7月24日
ギャラリー セイコウドウ（銀座1）

**■clair-obscur**
（井上樹里、小林宏至 他）
7月19日～7月31日
高輪画廊（銀座8）

**■開廊47周年記念展2021**
（小林宏至 他）
7月21日—7月29日
飯田美術（銀座7）

**■第53回主体美術秋田作家展**
7月22日～7月25日
秋田さきがけホール（秋田市）

**■第36回日本の海洋画展**
（佐藤善勇、手塚國彦、中村輝行 他）
7月30日～8月4日
東京芸術劇場（豊島区）

**■妄想公園**（井上樹里 他）
7月31日～8月20日
アキバタマビ21（千代田区）

**■一銀座を描く展ー**（岩井啓二 他）
8月2日～14日
永井画廊（銀座8）

**■池袋モンパルナスー画家たちの交差点**（寺田政明、吉井 忠 他）
8月7日～9月26日
しもだて美術館（茨城県筑西市）

**■渡辺良一展 ーモノ・コト・重なりー**
8月18日～8月23日
北見NHKぎゃらりー　ほっとすぺーす（北見市）

※展覧会案内状を機関紙担当（山田）、ホームページ担当（長沢）にお送りください。（会員・出品者問わず掲載いたします）

**機関紙『主体美術109号』制作スタッフ**

**■事務局作業者**
福田　玲子（責任者）
藤田　俊哉（機関紙部）
山田　礼二（機関紙部）

**■執筆者**
渡邉　俊行
榎本香菜子
續橋　　守
返町　勝治
グエン・ディン・ダン
長沢　晋一
工藤　悦子
前山　陽子
黒川　　洋
伊藤　明美
大西　佐頼

**■校正**
返町　勝治
長沢　晋一

**■カット**
大林　賢三（巻頭）
中嶋　　修（特集）

## 2021年 第56回主体展　日程

本　　展／東京都美術館（上野公園）
2021年9月1日（水）～9月17日（金）16日間（6日は休館）
公募搬入／2021年8月22日（日）・23日（月）
東京都美術館地下3階
京 都 展／京都市京セラ美術館本館2階南
2021年10月12日（火）～10月17日（日）
名古屋展／愛知県美術館8F
2021年10月26日（火）～10月31日（日）

### 編集後記

■「『画家と食』ってテーマはどうかな…?!」3月初めの zoom会議で齋藤典久さんからの一言。コロナの話題を離れて何かないだろうか? という問いかけへの答えに「なるほど！」と膝を打った次第。紆余曲折を経て、こういう読み物になりました。各執筆者の個性が際立ち、編集担当としては大いにこのテーマを楽しみました。皆さんはどうお感じになりましたか?　（藤田俊哉）

■東京オリンピック2020も終了し、パラリンピックが始まりました。こんな状況で開催して大丈夫なのか、賛否両論あり、それはこの1年間の主体展とも重なります。昨年できなかった分、今年は「美術館が開いている限り開催する」という目標を掲げました。昨年よりひどい状況なのに…という不安は正直あります。しかし、昨年からの各地方作家展では、美術館と協力して対策できたという経験を積んだ会員が多くいますので、これに学んで、開催できてよかったと言えるようみんなで難局を乗り越えましょう。　（山田礼二）